

國學院大學学術情報リポジトリ

日本宗教学会パネル「「靈魂の学知」と政治運動：
19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001792

日本宗教学会 パネル 「〈靈魂の学知〉と政治運動—19 世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に一」

1. はじめに

このパネルは、日本文化研究所における研究事業「近世国学の靈魂觀をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」（2008～2010 年度、責任担当者：松本久史）の研究成果の一部を日本宗教学会学術大会のパネルとして発表したもので、国学の中で展開してきた靈魂をめぐる学知について、本居宣長の門人組織である鈴屋と平田篤胤の門人組織気吹舎を焦点として、近世末／近代黎明期にあたる 19 世紀におけるこれら組織とそれに関わる人々の宗教性と政治性をともに検討した。

パネルの構成などは、以下の通りである。

年月日：2010 年 9 月 4 日

会場：東洋大学

代表者：松本久史

コメンテータ：加瀬直弥

司会：遠藤潤

発表：

松本久史「鈴門国学者と因伯神葬祭運動」

小林威朗「『靈能真柱』に語られた神と靈魂」

小田真裕「下総における幽冥觀の展開—気吹舎門人とその周辺—」

遠藤潤「黄泉国論争—平田国学の他界像と近代—」

三ツ松誠「飯田年平から見た国学」

2. パネル編成の趣旨

よく知られているように、「国学の靈魂觀」というテーマについては、これまで数多くの研究が重ねられ、すでに重要な成果が存在し

ている。今回のパネルでは、これらとは異なった角度から議論したいと考えた。

大前提としてあるのは、国学の多面性・多様性について、それが第一義としては学問であるという点を確認したいという問題意識である。国学は、靈魂觀・死生觀に関連して、宗教的なものとしてとらえられることが少なくない。しかしながら、鈴屋や気吹舎といった組織は近世的な意味での学問の組織であり、そこでの活動は学びとしての実践に根ざしている。靈魂觀・死生觀を検討するうえでもその点を確認するため、ここでは一連の知に対して〈靈魂の学知〉という名称を与えて論じることとした。

このような〈靈魂の学知〉を考察するに際して、このパネルでは思想と実践あるいは思想と組織を有機的に関係づけて分析した。一般に、宗教思想はひとり自己展開する形で現実のさまざまな動きになるわけではない。しかし、他方、現実の運動のなかで、思想はその内容ゆえに人々を方向づけ動かすことが少なくない。19 世紀国学の〈靈魂の学知〉をとらえるときにも、まさにそうした視点が欠かせないと考えられる。『靈能真柱』などにみられる〈靈魂の学知〉形成に重要な役割を果たした思想と、神葬祭をはじめさまざまな神職・国学者においてときに政治性をおびる運動をともに視野に収めることによって、近世末／近代黎明期の〈靈魂の学知〉のダイナミズムをとらえることができる。

また、国学の〈靈魂の学知〉をとらえる上で、平田国学を中心とした単系的理解もここでは退けたい。すなわち、靈魂についての国

学者たちの営みについて、極端に単純化された学統理解に回収することなく、その多様性を把握することを目指した。具体的には、鈴屋と気吹舎を二つの焦点としつつ、その学統だけでは理解できない動きも対象とする。

以上のような問題関心を前提として、研究所の研究事業のメンバーである松本、小林、小田、遠藤、三ツ松の5名が発表を行い、加瀬直弥（國學院大學研究開発推進機構）がコメントをした。各発表は次の通りである。

3. 発表の内容

(1) 松本は、宣長や篤胤が構築した〈靈魂の学知〉が、近世後期から幕末期にかけての神職による神葬祭運動に与えた影響を明らかにするという問題意識から考察を進めた。今回は、鳥取藩の神葬祭運動に焦点を当て、その中心人物で鈴屋門人だった飯田秀雄および子の飯田年平の行動と思想の関係について考察した。運動の過程を対象とした靈魂觀の直接の解明は困難である。飯田親子の学問の目的は、必ずしも神葬祭実現に限定されておらず、それは「神道の復古」という国学の学修から得た信念を背景としていたと考えられる。年平は篤胤に批判的であるが、政治的な運動にも積極的に参加するなど、鈴門と気吹舎門を対立的・相互排他的にとらえる従来の国学研究では把握できないあり方を示している。神葬祭運動は単なる宗教問題としてとらえられるべきではなく、18世紀後半以降の日本社会における神職集団の自立の問題と深く関わっており、すぐれて政治的な問題でもあった。

(2) 小林は、平田篤胤『靈能真柱』を対象として、そこに篤胤の独創性を見出す従来の傾向に対して、先行する宣長の神觀を受け入れ、あるいは反発した結果としてそれを読み直すことを目的として報告を行った。『靈能真柱』の冒頭部分における「靈の行方」と「魂の行方」について再考すべく、同書における「靈

と「魂」の用例を具体的に検討してみると、それぞれが他方にはない意味を示している用例がある。その場合、「靈」は現世に直接的に何らかの影響を与える場合に用いられており、「魂」は黄泉国に行かない説明に登場する。宣長は二つの語の使い分けこそしないが、現世に影響を与えるミタマと夜見に行くミタマの分在を想定しており、後者が夜見に赴いたことによって、地上に残った前者は経年によって消滅するという。篤胤はこの二種を「靈」と「魂」としてとらえた上で、後者は夜見に行かないとして、現世に影響する「靈」も不滅と考えた。このように、この点に関して、実は篤胤は宣長の説を批判的に継承したといえる。

(3) 小田は、平田国学の学知の地域社会での受容という問題設定のもと、下総の代表的な気吹舎門人である宮負定雄の活動および彼と関係の深い人々における学問の受容について考察した。宮負は、村民に対する教誡の必要性を痛感する中で『靈能真柱』に遭遇し、気吹舎に入門した。入門後は平田国学の〈靈魂の学知〉と深く関わる形態での村政改革を行った。この改革には同村の気吹舎門人の多くが参加しており、彼らにも〈靈魂の学知〉への関心やそれと村政レベルの政治運動をつなぐ意識は見られる。ただし、平田国学や〈靈魂の学知〉に対する態度は一様ではなかった。定雄は安政期に幽冥界への関心を強め、三沢明『神界物語』を重視するとともに、居村の門人に写本を与えるなどしていた。〈靈魂の学知〉が定雄の理解や取捨選択を介して伝えられ、受け手も自身の関心から接し、知識・経験に照らして理解する、という一連のプロセスにはそれぞれの人々の思想を理解する手がかりがある。

(4) 遠藤は、明治初年に宣教使が教化内容を確定する過程で生じた、ヨミの国の位置や形状をめぐる生じた論争（黄泉国論争）について論じた。篤胤の『靈能真柱』の内容につ

いて、当時の日本における対外的危機意識および日本の自立を確認するという文脈から改めて分析すると、政治性と宗教性の結びつきが明らかになる。同書は宇宙や国土の生成を神の〈たま〉から実体的に説明しており、〈たま〉を媒介にして国家の神話と個人救済が接合しており、国家と対外関係、地域社会の秩序、個人の救済という3つの次元が認められる。明治初年の黄泉国論争では、宣教使の組織に平田国学の関係者が多く含まれていたにも関わらず、篤胤の学説とは異なる、ヨミの国が地球の内部に存在するという地胎説が有力になろうとし、それをめぐって対立が生じた。この時期、平田国学の〈靈魂の学知〉は、内容に含まれるコスモロジーやそれを支える組織の問題も含めて、根底的な編成替えに直面していた。

(5) 三ツ松は、明治初年の新政府内部における国学者の布置を、平田派と津和野・鳥取派および考証派の対立図式で把握し、政府の祭祀・儀礼に携わることが多かった後者は前者と比較すると相対的に神霊への関心が薄いという一般的な理解を紹介した上で、後者に含まれる飯田年平を具体的に取り上げ、その思

想と実践について考察した。飯田年平の伝記的事実を確認した上で、近代の神祇行政における年平の動きを追い、さらに平田国学に対する年平の評価を分析した。幕末維新期は政治への志向性も強く藩の招魂祭にも関与した。教部省の教導政策が行き詰まったのちに著した「憂国私言」では「国体皇道」「尊内卑外」が説かれた。年平は靈魂実在を認めていたと推測されるが、死後審判を伴う靈魂論を否定した。日本人のナショナル・アイデンティティの確立にはコスモロジカルかつスピリチュアルな基礎付けが必要だと考えた篤胤の議論は、このような年平の立場からは有用なものとはいえなかった。

コメンテーターの加瀬は〈靈魂の学知〉が社会の中で展開した際の多様性について、地域社会における学知にかかわった人々の階層の問題などを例示しつつ、問題提起を行った。これに対する質疑の中で、神職や農民など階層によって対応が異なっていたことが示され、維新期における靈魂の安定をめぐる対応では、報告では主として鈴門と気吹舎が対照的な側面が紹介されたが、実際には多様な対応があったことが明らかにされた。

(遠藤潤)